



Data

監督：サム・メン德斯
 脚本：サム・メン德斯/クリスティ・ウィルソン＝ケアンズ
 出演：ジョージ・マッケイ/ディーン＝チャールズ・チャップマン/マーク・ストロング/アンドリュー・スコット/リチャード・マッデン/コリン・ファース/ベネディクト・カンバーバッチ/クレア・デュバーク

👁️👁️ みどころ

アカデミー賞作品賞・監督賞等10部門にノミネートされながら、英国のサム・メン德斯監督は韓国のポン・ジュノ監督に惨敗！「全編ワンカット映像」のこだわりで、撮影賞・録音賞・視覚効果賞の3部門の受賞のみに！

「伝令」の映画だから、設定も結末も単純。ポイントは、あの関門、この関門の描き方になるが、それは『パラサイト 半地下の家族』（19年）と同じくネタバレ厳禁だ。ロケーションのすばらしさ、演出・美術のすばらしさを堪能しながら、主人公たちの命を懸けた伝令ぶりをあなた自身の目でしっかりと！

関東軍は天皇陛下や陸軍中央の不拡大方針を無視して、現地軍の独断専行によって「張作霖爆殺事件」や「満州事変」を引き起こしたが、本作ラストにおける「命を懸けた伝令」の実効性は？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■10部門ノミネートも、英国は韓国に惨敗！■□■

サム・メン德斯監督といえば、古くは『アメリカン・ビューティー』（99年）でアカデミー賞監督賞を受賞し、近時は『007 スカイフォール』（12年）（『シネマ30』232頁）や『007 スペクター』（15年）（『シネマ37』208頁）の監督として有名。また『レボリューションナリー・ロード燃え尽きるまで』（08年）（『シネマ22』58頁）や『ロード・トゥ・パーディション』（02）（『シネマ2』143頁）等の傑作を次々と生み出しているイギリス人監督だ。また、本作では「≪全編ワンカット映像≫による異次元の没入体験」が注目されているが、それはアカデミー賞受賞監督サム・メン德斯の下に、『ブレードランナー2049』（17年）（『シネマ41』未掲載）の撮影のロジャー・ディーキンズと『ダンケルク』

(17年)『シネマ40』166頁)の編集のリー・スミスが結集したことによって実現できたものだ。その結果、本作は第92回アカデミー賞で作品賞・監督賞・脚本賞等計10部門にノミネートされ、「本年度アカデミー賞最有力!」とされていた。しかし、結果は韓国のポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)が、作品賞、監督賞、脚本賞、国際映画賞の4部門を受賞したから、英国は韓国に惨敗!『パラサイト 半地下の家族』は初のカンヌでのパルムドール賞とのダブル受賞も果たした。

「後出しジャンケン」がダメなことは百も承知だが、私は両者を観る前から、本作は所詮、伝令が走るだけの映画だから作品賞・監督賞はムリだと思っていた。逆に私は先に『パラサイト 半地下の家族』を観て、これはカンヌ国際映画祭のパルムドール賞にふさわしいと思ったが、アカデミー賞では、字幕でせりふが出てくる韓国映画の作品賞・監督賞は所詮ムリと思っていた。そのため『パラサイト 半地下の家族』の4部門受賞は想定外の驚きだったが、本作が作品賞、監督賞、脚本賞を受賞できなかったのは、予想通り。他方、それを逃した半面、撮影賞・録音賞・視覚効果賞の3部門の受賞には納得。さらに、日本人のカズ・ヒロ(旧名:辻一弘)が本作を押しつけて『スキヤンダル』(19年)でメイク・ヘアスタイリング賞を受賞したのも当然だと納得。

■全編ワンカット映像ってホント?こりゃ少し誇大かも?■

映画検定3級の私が教科書にした『映画検定公式テキストブック』(キネマ旬報映画総合研究所編)には、「シーン」とは?「ショット」とは?「カット」とは?「シークエンス」とは?の定義があり、さらに「テイク」の定義もある。それによると、ショット(Shot)とは、「日本ではカットと呼ばれることが多い。映像の単位で時間的に連続して撮影されたフィルムの中のコマから末尾のコマまでを1ショット(Shot)と数える。」とされている。次に、シーンとは、「一つの場所あるいは特定の人物の行動を連続して描写したショットの集合体をシーン(Scene)といい、「シーンが集まって一つの場面やエピソードになったものをシークエンス(Sequence)という。」とされている。他方、カット(Cut)とは、日本ではショットの意味でつかわれることが多いが、監督が「カット」と言うと、「そのショットの撮影が終了したことを意味する。」また、テイク(Take)とは、「監督が『カット』を宣言するまでにカメラが撮影した部分を呼ぶ。」とされている。それを踏まえると、本作では「《全編ワンカット映像》による異次元の没入体験が、映画の歴史を変える―」が統一されたキャッチコピーになっているが、それってホント?前述の定義によると、そんなことは不可能なのでは?

本作を実際に観るまで、私はそれがずっと疑問だったが、本作を観て、また、パンフレットの「PRODUCTION NOTES」を読むと、こりゃ少し誇大かも?そう思わざるをえない。つまり、「PRODUCTION NOTES」には、「まず、誤解のないように言っておくと、本作はワンカットで撮影されたわけではない。」とハッキリ書かれている。また、多く

の新聞紙評でも、「全編ワンカット映像！」というフレーズは使われているものの、他方で「全編ワンカットに見える撮影方法で追いました。」「ワンシーンをワンカットで撮影して滑らかにつないだ突出した技術。」「全編を通してワンカットに見える映像。全編途切れることなく、ひとつつながりの映像として見せてくれるこのダイナミックな撮影方法」等と正確な表現に修正されているので、それをしっかり確認したい。

■□■監督の祖父がモデル！2人の伝令の任務は？■□■

『第三夫人と髪飾り』（18年）は、ベトナムの新進女流監督、アッシュ・メイフェアの曾祖母がモデルだったが、本作はサム・メンデス監督が祖父の戦闘体験から着想を得たもの。つまり、サム・メンデス監督の祖父である故アルフレッド・H・メンデスは1917年に19歳でイギリス軍に入隊し、小柄だった彼は西部戦線で伝令兵の任務に就いたらしい。サム・メンデス監督はそんな祖父から聞いた数々の話の他、ロンドンの帝国戦争博物館で当事者の証言を集め、本作の構想を練ったわけだ。

しかして、本作は1917年4月6日の金曜日、眠りについていた第8連隊に所属する上等兵トム・ブレイク（ディーン＝チャールズ・チャップマン）が、ある任務のために叩き起こされるシーンから始まる。「誰か相棒を探せ」と言われたトムは、すぐ隣に寝ていたウィリアム・スコフィールド（ジョージ・マッケイ）を指名したため、この2人はエリンモア将軍（コリン・ファース）から伝令の任務を与えられることに。その任務は、マッケンジー大佐率いるデヴォンシャー連隊第2大隊に、攻撃中止命令を伝えることだ。しかし、その任務に熱心なのはデヴォンシャー連隊第2大隊に兄がいるブレイクだけで、スコフィールドは「慎重に！」という表現ながら、本心はどうもそんな危険な任務の遂行に消極的。本作導入部ではそんな風に思ってしまうスコフィールドが、実はサム・メンデス監督の祖父をモデルにしたキャラらしい。

冒頭のそんなシークエンスを経て、危険な任務に踏み込んでいく導入部のシークエンスでは、2人の伝令のうち主導権を握るのはブレイクで、スコフィールドは仕方なくそれについて行ってるだけという印象だが、さてその実は？

■□■地図が、展開がわからん！それは伝令も現実も同じ！■□■

戦地での経験がほとんどない19歳のブレイクが先に伝令に選ばれたのは、地図を読むのが得意だったことと、デヴォンシャー連隊第2大隊の部隊に実の兄が所属していたため。つまり、こいつなら必死で任務にあたるだろう、と考えられたためだ。それに対して、ブレイクより1年ほど早く入隊し、多くの兵士が犠牲となった「ティプヴァルの戦い」を経験しているスコフィールドが、惨状を繰り返したくないため安全に任務を遂行しようとしていたのは仕方ない。エリンモア将軍からブレイクに与えられた情報は、①これまで目の前にあったドイツ軍の塹壕は放棄され、ドイツ軍は退却したこと、②しかし、これは退却

に見せかけた用意周到な罠であること、③つまり、航空写真によれば、ドイツ軍は要塞化された陣地を築き、追撃してくるイギリス軍を待ち構えていたこと、④翌朝に予定されている攻撃を中止しなければ、デヴォンシャー連隊第2大隊を率いるマッケンジー大佐と1600人のイギリス軍は、ドイツ軍の未曾有の規模の砲兵隊によって全滅させられてしまうこと、だった。

他方、パンフレットの「STORY」には、「エクストという町の南東2キロにある、クロワジルの森に向かって前進する第2大隊に追いつくには、ドイツ軍が築いたブービートラップだらけの塹壕や、ドイツ占領下の町を越えて行かなくてはならない。」と書かれているが、私たち観客には、全体の地理関係がサッパリわからない。《全編ワンカット映像》をうたい文句にするのなら、せめて冒頭に全体の地図や2人の伝令の進路くらいは図示してくれるのもいいと思うのだが、サム・メンデス監督にはそんな親切心(?)はないらしい。そのため、ブレイクは地図を読むのが得意だったから伝令として自分が進むべき前述の進路はわかっているし、スコフィールドもそれなりに理解しているようだが、観客にはそれがサッパリわからない。また、目の前の塹壕に結集していたはずの、につっきドイツ軍が退却していることは2人が進み始めてすぐにわかったものの、「ブービートラップ(仕掛け爆弾)」については観客はもちろん、スコフィールドやブレイクにもそれがどこに仕掛けられているか、全くわからない。さらに、クロワジルの森にたどりつくまでにはドイツ占領下の町も越えて行かなければならないが、そこには危険がいっぱいのはずだ。

アカデミー賞作品賞・監督賞・脚本賞・国際映画賞を受賞した『パラサイト 半地下の家族』はポン・ジュノ監督が自らネタバレ厳禁を宣言するほど予測不可能な展開が見モノだったが、本作もそれは同じ。したがって私たち観客も、地理がわからん！展開がわからん！そんな思いを共有しながら「命をかけた2人の伝令」と共にクロワジルの森を目指して歩み続けることに・・・。

■□ロケーションに注目！ “この関門” “あの関門” に注目！ ■□

本作は2人の伝令が与えられた任務を遂行する1917年4月6日の1日を描いたドラマだとわかっているから、2時間のドラマとして楽しませるためには、その中どんなエピソードを入れ込むかがポイントになる。したがって、それをネタバレさせるのは『パラサイト 半地下の家族』と同じく厳禁だから2人の伝令が歩み続ける中で次々と展開している“あの関門”“この関門”についてここに書くことはできない。ちなみに、本作のパンフレットには戦史研究家・白石光氏のコラム「『1917 命をかけた伝令』、そのリアル～本編の描写で読み解く第一次世界大戦の実相～」があり、そこでは、①腐った泥の海だった「激戦地の大地」、②死の置き土産「仕掛け爆弾」、③兵器として使われた「航空機」、④見えない恐怖「狙撃兵」、⑤第一次世界大戦の縮図たる「本作の世界」の解説があるので、これは必読！また、パンフレットの「PRODUCTION NOTES」には「ロケーション」

について詳しく解説されているので、これも必読だ。

第1次世界大戦の塹壕戦を描いたの映画は、最も有名な『西部戦線異状なし』(30年)の他、『戦火の馬』(11年)『シネマ28』98頁)等がある。直近では『再会の夏』(18年)もそれだった。しかし、イギリスとドイツの塹壕の違いを明確に示した映画は本作がはじめてだ。また、本作はCGではなく、イギリス軍、ドイツ軍双方のホンモノの塹壕を数百メートルにわたって現実で作っている。スコフィールドとブレイクが通過するフランスの農家の納屋や離れも現実に建設されたものだ。したがって、それを舞台としたスコフィールドとブレイクの歩みの撮影がリアルなのは当然で、アカデミー賞撮影賞の受賞も当然だ!

ちなみに、戦争映画に女性の登場が少ないのは当然だが、本作のパンフレットの「CAST PROFILES」には1人の女性も登場していない。しかし、ラストの「CAST」の表示では、ラウリ(クレア・デュパーク)が女優として表示されている。しかし、この“紅一点”は本作のどんなシークエンスでどんな役割で登場してくるの?それも私はここで書きたいのだが、ぐっと我慢……。

■□■伝令の実効性は?攻撃中止命令の実行は?■□■

ネタバレ厳禁とされている(?)“あの関門”“この関門”を突破する物語の中の1つとして、スミス大尉(マーク・ストロング)が登場する。彼は伝令として重要な任務を遂行しているスコフィールドに対し、「必ず第三者の前で、マッケンジー大佐に手紙を渡せ」とアドバイスしていたが、その意味は?それは、攻撃開始命令を前に血気と功名心にはやる軍人(指揮官)に対して、突然上からの「攻撃中止命令」を手渡しても、それを実行するのは極めて難しい、ということだ。その典型が、満州に展開していた旧関東軍が、日本軍全体の統帥権者である天皇陛下の命令を無視して、現地だけの暴走で起こした満州事変だ。すなわち、1928年の張作霖爆殺事件(別名「奉天事件」、また「満州某重大事件」)が関東軍高級参謀だった河本大作の首謀によるものであったことはこれまでの研究によって動かしがたいものになっている。また、1931年9月18日の柳条湖事件とそれに端を発する満州事変も政府の不拡大方針や陸軍中央の局地解決方針を無視し、自衛のためと称して戦線を拡大しようとした関東軍の独断専行だったことは、今日明らかになっている。本作の邦題には『命をかけた伝令』というサブタイトルが付いているが、原題は『1917』だけ。しかし、パンフレットの表紙に「TIME IS THE ENEMY」と書かれているように、伝令には賞味期限があり、伝令が実効性をもつのは、期限内に命令が伝えられた時だけだ。そして、問題は更にある。それは、命令書が期限内に届けられたとしても、命令を受けた者がそれを握りつぶしてしまったり、極端な場合その伝令を殺してしまい、伝令など来なかったとウソをつき通せば、攻撃中止命令の実行はできなくなってしまうということだ。

しかして、本作ラストは、さまざまな関門を潜り抜けたスコフィールドが、やっとデヴォンシャー連隊第2大隊のマッケンジー大佐に出会えるシークエンスとなる。しかし、スコフィールドが到着したその時は、既に第1波の攻撃命令は出されており、第2波の攻撃命令が出されようとする直前だった。そんな状況下、エリンモア将軍からの伝令として飛び込んできたスコフィールドをマッケンジー大佐が当初無視したのは仕方ない。しかし、スコフィールドが将軍からの攻撃中止命令だと執拗に食い下がったため、その命令書を読まないわけにはいかなくなり、また、それを読んだらそれに従わざるをえなかったのは軍人としては仕方ない。スリルとサスペンスを求める面白い映画なら、ここらあたりでホントはもうひとひねり欲しいところだが、『1917』と題された正当派戦争映画の本作では、それはムリ。その結果、本作は『パラサイト 半地下の家族』のような、あっと驚く結末ではなく、想定通りのものに収束していくことになる。そこであらためてスコフィールドのこれまでの苦勞に「ご苦勞様」となるわけだが、さて、あなたはそんな本作をいかに評価？

2020（令和2）年2月20日記